実力向上講座（漢字仮名交じりの書）

【第十一回】仮名と漢字の調和（2）

山梨大学准教授　清水　文博

◇はじめに

今回は、細字で仮名に漢字を合わせて書く課題に取り組みます。取り組みにあたっては、仮名を書く際と同様の事前準備が必要になります。事前準備を行ってから課題の俳句を半紙に書きます。

■細字練習を行うにあたって

仮名に漢字を合わせて書くにあたり、今回は文字を細字の仮名練習の大きさに準じた大きさで書きたいと思います。漢字を主体とした練習よりも小さく書くことによって、仮名の美に迫りたいからです。用具は、小筆の柳葉筆を準備し、穂先のみおろして使用しましょう。半紙は仮名用の滲まない白色半紙を準備してください。墨は仮名用の固型墨を磨墨してください。競書課題の仮名有級（二十八頁）で提示する用具用材と同様になります。

「いろは」を細字で練習したことがない方は、まずは「いろは」を一通り書きましょう。仮名の入門書には「いろは」が必ずあり、古筆から集字したものが掲載される場合は「粘葉本和漢朗詠集」や「高野切第三種」が採用されるのが定番です。独学で「いろは」を学習する場合には、高等学校の芸術科、「書道」の教科書を参考にすることをお勧めします。（注1）

一通り細字による「いろは」を学んだ方のために、「元永本古今集」による「いろは」【図1】を用意しました。そのまま書いてもよいですが、適宜拡大コピーして近づけて書くと見やすいと思います。結びなどの内部の隙間の処理の仕方等、思い浮かんだ「いろは」と字形比較をしながら書きましょう。「元永本古今集」では二筆で書いている「て」が多いのですが、漢字仮名交じりの書の参考に一筆の字を採用しました。「と」は三筆で書いたものを採用しています。凜とした味わいをみせる「元永本古今集」の字形を確かめてください。

漢字に合わせた仮名字形の研究については、本連載の第六回（昨年九月号）と第七回（同十月号）で書きました。こちらも別の視点からとらえたものとして参考になると思います。

（注1）高等学校芸術科、「書道Ⅰ」の教科書には、漢字仮名交じりの書に限らず、書を学ぶ上での基礎的な事項がまとめられている。教科書は全国の教科書供給会社および取次店で購入可能。

■仮名古筆の臨書

「いろは」のほか事前練習としては、仮名古筆の臨書も行いましょう。一般的に学ばれる「高野切」等の練習をお勧めしますが、学習が進ん

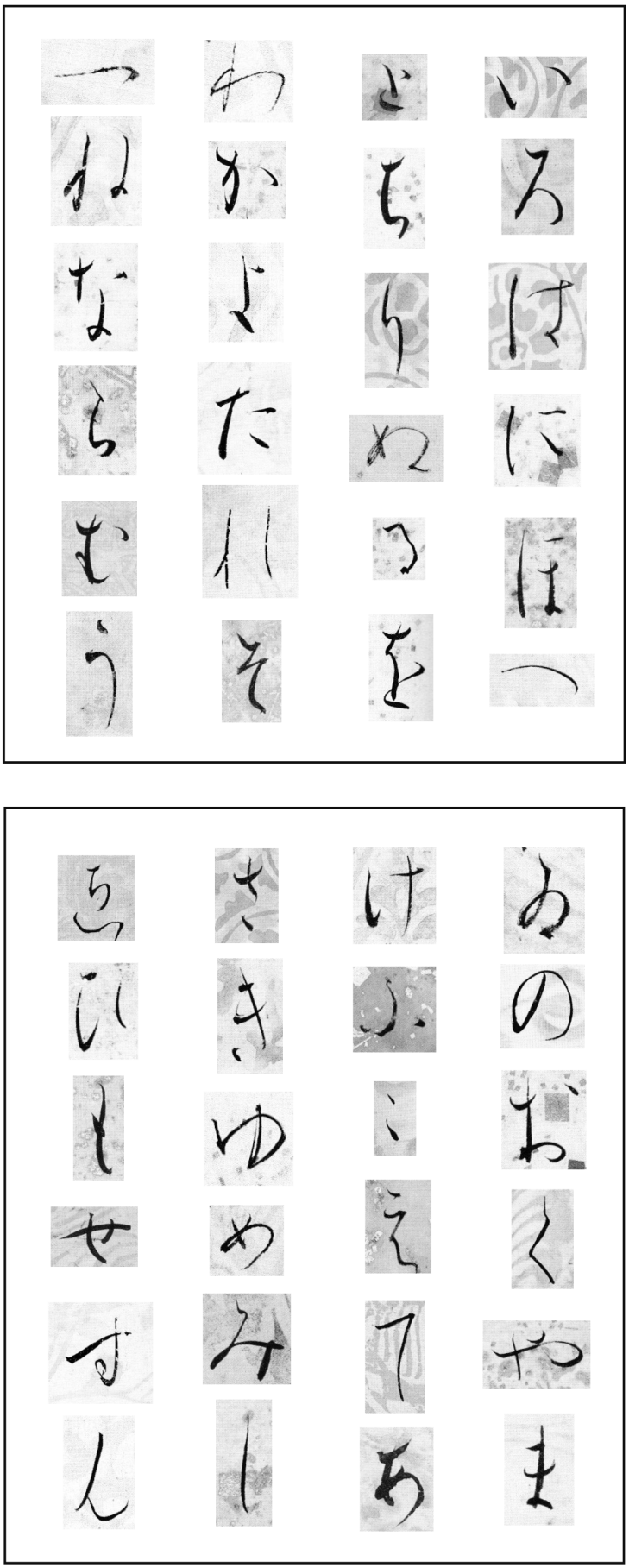
でいる方は漢字仮名交じりの書につなげる視点で、他の古筆の臨書に取り組むとよいでしょう。「藍紙本万葉集」【図2】（次頁）は力強い独特の書風で知られる古筆です。このような『万葉集』写本の場合は、同じ文言の漢字の練習ができるので、漢字部分を含めた臨書をしてください。一部を抽出し、漢字と仮名を交ぜて書く練習も面白いと思います。

以上、練習にあたっての事前準備について書きました。漢字に仮名を合わせたときは大字を主体としたために、練習は行いやすかったと思います。しかし今回取り組む練習は、初学の方や普段細字の仮名に取り組んでいない方にはハードルが高い場合がありますので、この項を設けました。勿論、学習が進んでいる方は目習いという取り組み方で十分だと思います。「元永本古今集」「藍紙本万葉集」のほか、さまざまな古筆を目習いしましょう。

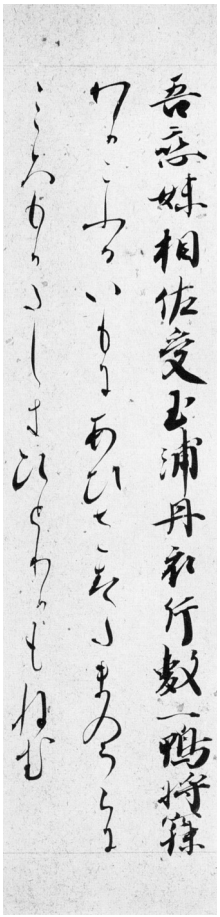
■細字による練習

それでは実際に練習しましょう。ここでは課題として半紙に高浜虚子の句「白牡丹と　いふといへども　紅ほのか」を書きましょう。「仮名を基調とした書きぶり」で半紙に「五・七・五」の形式で改行し三行で書いてください。文字が大きくなり逆に書きづらい場合は、半紙を半分に切って縦使いで使用してもかまいません。漢字は行書、仮名は平仮名のみを使用してください。

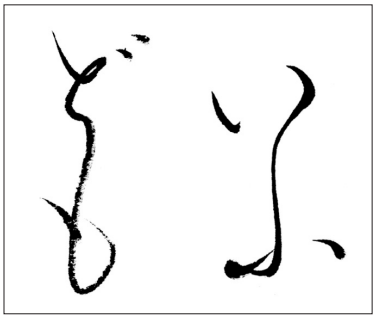
このように、仮名を基調とした書きぶりで書く課題では、連綿が多くなり過ぎる傾向があります。しかし、漢字仮名交じりの書なので、なるべく連綿をさせずに、字形や線質で仮名らし



【図１】「元永本古今集」



【図２】「藍紙本万葉集」



【図３】連綿の例

【図４】漢字字形の例

さを表現したほうがよいでしょう。連綿は全くさせないか、二、三文字程度にとどめましょう。漢字部分は連綿させなくてもよいでしょう。「いふといへども」の部分では【図３】のように「いふ」と「ども」程度で十分だと思います。「ども」を連綿させるときは「とも」と書いてから濁点を打ちます。

現代の漢字仮名交じりの書では基本的に変体仮名を使用しません。仮名の歴史を考えたとき、変体仮名を全く使用しない連綿はそもそも不自然ですから、自然と連綿は少なくなります。連綿を控えめにする理由は、単に仮名の書と区分したいからだけではないということです。ただし、流麗さを強調したいなど、表現の目的や使用されている文字によっては多くの連綿が可能であることを付記します。

最後に漢字部分の字形を確かめましょう。【図４】にある「白」「牡」「丹」「紅」は、日本の古名蹟（こめいせき）の字形なので参考にしてください。どの漢字も実際に行書で書いてみると、難しい崩し方はないはずです。画数も多くないため、仮名と調和しやすいといえましょう。本課題には極端に画数の多い漢字はありません。画数の多い漢字は草書にして調和しやすいように書くか、あえてあまり崩さず、作品のアクセントにすることも考えられます。

■まとめにかえて

平安時代の小さな仮名に漢字を合わせて漢字仮名交じりの書を書くという考え方は、現代社会と乖離（かいり）した貴族文化に耽溺（たんでき）した考え方だという見方があるのは確かです。ただ一方、仮名の成立から間もない時期に書かれた上代様（じょうだいよう）の仮名が今日的にみても、最も優れているということは確かです。平安時代の文化の意識を現代にうまく溶け込ませ、仮名と仮名に合わせた漢字の表現を試みてください。

また、仮名を基調として細字で書いた作品では色とりどりの料紙と作品が合わせやすいので、取り組む上での愉（たの）しみになります。仮名用料紙のほか、和紙、折り紙等に書くこともできます。実用への応用のしやすさも見逃せない点です。ぜひ、細字による仮名を基調とした漢字仮名交じりの書に取り組んでください。

◇

最後に漢字仮名交じりの書を鑑賞しましょう。今回は肉筆作品ではなく印刷された教科書【図５】（注２）です。この教科書を執筆した村田（むらた）

【図５】『小学習字帖』

海石は大坂に生まれ、巻菱湖（注３）門下の萩原秋巌に師事した書家です。特に西日本にて令名をはせました。明治期、村田の書いた教科書は穏健で端正な書風が支持されて全国で使用されました。

手紙の書き方の練習である今回掲載した部分の直線的筆致からは、趙孟頫等の影響を感じます。萩原秋巌が学んだといわれる唐代の楷書の影響もあると考えます。細過ぎない線で書かれた漢字と仮名がびっしりと組み合わされており、小さな文字と大きな文字を効果的に配置している点が見どころです。明治前半の教科書で粗い印刷ですが、そのことにより陽刻の拓本を見るかのような味わいが感じられます。

（注２）海石郵田浩蔵『小学習字帖　高等科第四』福島県尋常師範学校、一八八六。

（注３）江戸時代後期の書家。市河米庵、貫名菘翁とともに「幕末の三筆」といわれる。

試験の期日も最早
近より候ニ付某等と
申合せ今夕より諸科
復習致し候間御光
来下され度候